

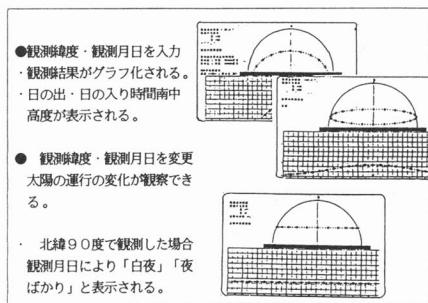
3 既製ソフトウェアの改善

(1) ソフトウェアの検討

既製のソフトウェアで、4類型のシミュレーションに対応できるよう、次の事項を中心に検討した。

- ① 指導過程のどの場面で、どのように使用できるか。
- ② 生徒にどのように提示し、どんな発問が効果的か。
- ③ 生徒に操作させるためにはどう改善したらよいか。
- ④ 生徒に操作させることが効果的か。
これらを通して、生徒の実態に合うようにソフトウェアの改善を行った。

(2) 改善したソフトウェアの内容



(プログラムは科学技術教育部 八巻茂雄)

III 概要と考察

1 指導の実際—指導過程と生徒の活動

段階	学習内容・学習活動	教師の主な働きかけ
課題把握	1 地球の昼夜、日の出、日の入りを確認する。 	・静止衛星からの写真を3枚提示する。 ・何月頃の太陽の運動を確認してみたいですか。

2 簡易太陽高度計と透明半球を使った観察結果をシミュレーションで確かめる。



・太陽を1年間観察したら、どうなるのだろう。

2 検証と考察

(1) 各段階でのシミュレーションの有効性

<授業のようすや自己評価などから>

① 教材提示のシミュレーション

教師は、生徒の発言をすぐに取り上げ、3か月間のデータを入力し、シミュレートさせた。教材の一方的な提示ではなく生徒の反応に応じた提示ができた。課題把握の5段階自己評価は学級平均4.3であり、課題把握は有効であった。

② 実験・観察確認のシミュレーション

パソコンを代わるがわる全員が操作し、太陽の日周運動の記録をシミュレーションで確認した。観察の方法や結果の誤差などを考えさせるために有効であった。

③ 情報収集のシミュレーション

年間の太陽の動きのデータを収集、グラフ化することができた。普段、図表化を不得意としている生徒も、積極的に取り組み、ワークシートの3段階評価では約90%の生徒が3であった。

④ 問題解決のシミュレーション

各班で観測緯度や観測月日を自由に変え、活発に話し合いをしてモデル化を取り組んでいた。また、北極での太陽の日